

「底が突き抜けた」時代の歩き方 436

イエスとは「何をする者」であったのか - 「父よ、彼らを赦したまえ。

彼らは自分が何をしているのか、わからないのです」

十字架につけられたイエスが、「父よ、彼らを赦したまえ。彼らは自分が何をしているのか、わからないのです」と言ったことが、『ルカによる福音書』にのみ書き留められている。《人々はイエスの着物をくじ引きで分け合った。民衆は立って見ていた。役人たちもあざ笑って言った、「彼は他人を救った。もし彼が神のキリスト、選ばれた者であるなら、自分自身を救うがよい」。兵卒どももイエスをののしり、近寄ってきて酔い^すぶどう酒をさし出して言った、「あなたがユダヤ人の王なら、自分を救いなさい」。イエスの上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札がかけてあった》(23・34 - 38)という光景が続いて描写されている。

もちろん、人々はイエスを十字架にかけて処刑しようとしていたのであるが、イエスはそのことの意味がわからぬまま、いや、わからないが故に人々はそうしているといっているのだが、この冒頭の言葉が非常に印象的に思われるのは、イエスを十字架に吊した人々は、「自分が何をしているのか、わからない」まま、ずっと生きつづけることが示唆されているからである。これはどういうことかといえば、イエスは永遠に十字架に吊されつづけるということを意味している。人々の子孫も、永遠に「自分が何をしているのか、わからない」ままでありつづけるということだ。要するに、「自分が何をしているのか、わからない」人々によって、イエスは葬られていったのである。このことは、人々が「自分が何をしているのか、わからない」かぎり、イエスは永遠に十字架の上に吊されつづけることを意味するし、「イエスの復活」は「自分が何をしているのか」に人々が気づくことによってしかありえないことを意味していた。

福音書は伝道のための書であり、作者はその点に最大の眼目を置いて記述されていたから、当然のことながら、「イエスの復活」は当初は弟子たちの間に起こって、人々に対しては弟子たちが「イエスの復活」を体現しながら、イエスの言葉を伝えていくという布教活動がなされていった。イエスは本当に弟子たちの間に「復活」したのだろうか。いうまでもなく「自分が何をしているのか、わからない」人々の中に弟子たちも紛れもなく含まれていた。しかし、そのことに最大に気づきやすい位置に弟子たちが蹲っているのも確かであった。だから、弟子たちは自分たちが気づいた程度に応じて、人々に彼ら自身の振る舞いのわからなさの中に踏み入り、キリスト教を布教していくことになった。

人々にむかって「彼らは自分が何をしているのか、わからない」とイエスがいうとき、その言葉はイエスが自分について、何をする者であるかがわかっていなければ成り立たない。では、イエスとは一体「何をする者」であり、「何をする者」としてのイエスを処刑しようとする人々は、一体「自分が何をしているのか、わからない」者たちであったのか。

田川建三の『イエスという男』によれば、ローマの帝国支配の歴史の中で当時、ユダヤの独立戦争を果敢に戦う民族解放の戦士集団がいた。彼らが熱心党と呼ばれたのは、《ユダヤ教伝来の律法に対して「熱心」であった》からであり、《民族主義的なラディカリスト》であった。この熱心党とイエスの活動には何の接点もなかったが、宗教学者の田川氏は福音書の中で、《パリサイ派を中心とした律法学者、そして、エルサレムの宗教的支配当局（サンヘドリン）と祭司階級とが、何度も何度も直接にイエスの対決した相手として言及されている》こと以外の妄想を自らに禁じて、ペテロが「サタンよ、しりぞけ」と叱られた話（マルコ 8・33）を取りだして、こう説明する。

《イエスについて人々のなしている噂話を、つまり、イエスは預言者であるとか、終末時に神が顕現する直前に先駆者として再臨することになっているエリヤであるとか、ヘロデ・アンティパスにくびを切られた洗礼者ヨハネがよみがえったのである、といった噂話を紹介したあと、福音書記者マルコは、ペテロー派の意見として、イエスはキリストである、という見解を記している。キリストという語は、周知のように、「油を注ぐ」という動詞の受動形からつくられた名詞で、「油注がれた者」という意味であり、ヘブライ語のメシアの直訳である。そして、旧約書、後期ユダヤ教では、「油注がれた者」とは神によって特別に選ばれた者（聖別のしるしとして頭に香油を注ぐ）という一般的な意味から、もっとも限定して、神的な支配権の委託を受けた者という意味で、「王」について特に用いられた。イスラエルが国家的統一と独立を失ってから、メシアは、民族的かつ宗教的な救済者としてだんだん理想的な像となり、超越的な者として待望された。キリスト教のキリスト像は、そこから民族的要素をぬき去って、純粹に宗教的な救済者の理念に仕立てあげたものである。もっとも、原始エルサレム教会をつくったペテロー派の場合には、まだ民族的要素を消し去ったわけではない。しかし民族的な救済の待望と言っても、現実的に政治的な独立を目ざす者から（その場合は、何らかの形で反ローマ抵抗運動をすることになる）宗教的な終末待望へとそれを疎外してしまう者まで、ずい分と幅があった。

マルコの記述に話をもどして、マルコはここで、彼の描くイエスに拒否的な反応を示させている。ペテロが、「あなたこそキリストです」と言うと、イエスは、そういう仕方、つまり、宗教的メシア論の論議の中で、通常の預言者か、特別な終末論的預言者か、エリヤか、それともヨハネのよみがえりか、といった規定と比較し、それらの規定を排除しつつ、キリストという概念を選びとる、という仕方、つまりイエスについて論じてはならない、と沈黙を命じている（8・30）。これはおそらく実際の会話ではなく、イエス死後の原始エルサレム教会を中心としたメシア論議と、それに対して批判的な著者マルコの気持とを、

歴史的な場面に仕立てあげた巧みな創作であろう。その意味でこの会話場面は史実ではないが、しかし、イエスの歴史の実体にせまろうとしたすぐれた創作であると言える。マルコは、イエスの歴史的現実が持っていたひろがり、宗教的なメシア論議に解消させたくはなかったのだ。この会話にさらに続けて、マルコの描くイエスは自分の死を、しかもユダヤ教支配当局の手による虐殺の死を予告する。それに対してペテロが、そういうことはあってはならない、と反対するのだが、そのペテロに向ってイエスは、サタンよ退け、と叱りつける（８・３３）。会話のこの部分は、伝承史的には複雑である。つまり、実際の事実の何らかの記憶がここに反映していることは否定できないし、他方、８・３１の死の予告の一句は、言葉づかいとしては、原始教団の神学的言葉づかいであるし、それらの素材を用いつつ、マルコが、自分のペテロに対する批判的な意識から、この会話全体を創作しているからである。従って、いずれにせよ、この会話を直ちに史実とみなすわけにはいかないが、著者マルコの見解としてみても、ここでは、言うところの「熱心党」的な政治的メシア像（…）を排して、「神の子」の十字架上の「受難」による宗教的救済が主張されている、などと解釈するわけにはいかない。むしろここで排されているのは、宗教的なメシア論議にイエスの存在意義を閉じこめて論じることであり、主張されているのは、エルサレムの宗教的支配勢力に抵抗して殺される批判者の姿である。マルコはここで、エルサレムの、またパレスチナのユダヤ人社会全体の、宗教的な上部構造をもった社会支配体制に鋭く抗って殺されたイエスと、そのイエスの「弟子」でありながら、エルサレム支配体制の中にうまく自分達の宗教集団を安全にすべりこませて生きていたペテロー派とを、対照させて描いている。》

イエスは「何をする者」であったのか。田川氏が取り上げているマルコ伝（８・２７－３３）には、次のように記述されている。

《さて、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村へ出かけられたが、その途中で、弟子たちに尋ねて言われた、「人々は、わたしをだれと言っているか」。我らは答えて言った、「バプテスマのヨハネだと、言っています。また、エリヤだと言い、また、預言者のひとりだと言っている者もあります」。そこでイエスは彼らに尋ねられた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロが答えて言った、「あなたこそキリストです」。するとイエスは、自分のことをだれにも言ってはいけないと、彼らを戒められた。

それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日の後によみがえるべきことを、彼らに教えはじめ、しかもあからさまに、この事を話された。すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめたので、イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた、「サタンよ、引きさがれ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。》

田川氏はこの場面をマルコの創作だという。イエスをキリストとみなすペテロー派の見解に対して、「あなたこそキリストです」と答えるペテロをイエスが戒めたり、また自ら

の受難、復活をあからさまに話すイエスをいさめるペテロを叱る場面を創作することによって、《マルコは、イエスの歴史的現実が持っていたひろがり、宗教的なメシア論議に解消させたくはなかった》し、《エルサレムの宗教的支配勢力に抵抗して殺される批判者の姿》を主張したかったのだ。イエスに宗教的なメシア像ではなく、一人の逆説的反抗者を覗き見る田川氏による我田引水的な臭いも感じられなくはないが、彼はマルコ伝のこの場面から、イエスは「何をする者」であったかという問いに対して、エルサレムの宗教的支配勢力に抵抗する「逆説的反抗者」であったと答えているのだ。

福音書がイエスを宗教的メシア像に引き絞って記述されていることは間違いないとしても、宗教的メシア像では覆い尽くされない一人の男の姿が福音書の隙間からゆらゆらと立ち上ってくるのも確かであり、キリスト教徒ではない多くの者たちを惹きつける福音書の魅力はそこに拡がっている。つまり、福音書として作成されながら、イエスの言葉と行動について書き留めれば書き留めるほど、福音書には収まりきれない部分が大きく露出してくるという構造に貫かれているのだ。田川氏は福音書を大きくはみだす部分に焦点を当てて、イエスから「逆説的反抗者」の像を引きだすのだが、この像の苦しさはイエスの逆説的反抗が一体どこに向かっていたのかが、よくみえてこないところにあるだろう。イエスの逆説的反抗の行き先がみえなければ、弟子たちがイエスに従うこと自体が困難であった。

《イスラエルが国家的統一と独立を失ってからは、メシアは、民族的かつ宗教的な救済者としてだんだん理想的な像となり、超越的な者として待望され》るという状況の中では、ペテロが「あなたこそキリストです」とイエスにいい、キリストであるあなたに我々はついて行っているのですと示唆するのは、ある意味で当然であった。ところが、イエスはそれを戒めて、自分がキリストであるかどうかについては肯定も否定もしなかった。イエスがもし明確にキリストであることを否定すれば、弟子たちがイエスから離れ去るかもしれない。では、肯定すればよかったということになるが、この場面を創作したマルコからすれば、そうはしなくなかった。田川氏によれば、マルコはイエスとキリストとが重なり合わない要素を感じ取っていたからだ。マルコに限らず、福音書の中のイエスは、キリストであるとも、キリストでないともいいきれない野辺を精力的に歩きまわっていたのだ。

メシア待望が強い民衆の間に踏み入っているイエスと弟子たちは、民衆からイエスがキリストと受けとめられるのを敢えて否定しなかった。イエスをキリストと思い込んでいる弟子たちと異なって、おそらくイエスは民衆によって自分がキリストと受けとめられるがままにさせていたようにみえる。イエスからすれば、自分がキリストなら歓迎し、キリストでないなら歓迎しないのか、といった気分であったかもしれない。先のマルコ伝の場面にくつ次場面（８・３４－３８）は、このイエスの気分をよく映しだしていると思われる。

《それから群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を

失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になるのか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができるのか。邪悪で罪深いこの時代にあって、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう。」》

このイエスの言葉もマルコの創作であるかどうかはわからないが、少なくとも自分をキリストだと思ってついてくるのか、それとも自分をキリストだと思わなければ去っていくのか、という問いにイエスは明瞭に答えている。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」という言葉は、イエス自身がキリストであるかどうかにかかわらず、という含みをもたせていたからだ。いいかえると、自分がキリストであるから、誰でもついてくるというのは間違っている。「自分を捨て、自分の十字架を負うて」生きていこうとするなら、誰でもイエスに出会う筈だ、といっているように聞こえるのである。「自分を捨て」ないし、「自分の十字架を負」わないなら、どうしてイエスに出会うことができるだろう、ということだ。「自分を捨て、自分の十字架を負う」度合いで、誰でも本当に自分に出会うことができるし、「自分の命を救」うことができるということなのだ。

「自分を捨て」ということは、自分を否定することではない。自分が自分を超える水準をもって生きることである。そして「自分の十字架を負う」ことは、自分が背負わなくてはならない十字架を見出すことである。自分をたえず超えていきながら、自分にふさわしい十字架を背負って生きていくなら、誰でも自分と異なる自分に出会う中で、イエスにも出会っているということだ。このイエスの言葉はけっして教義的な言説ではありえないが、しかし、「邪悪で罪深いこの時代にあって、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう」という、「神の国」到来発言が後に記述されることによって、福音書としての性格はきちんと貫かれているのである。

福音書の作者の創作か否かにかかわらず、イエスの言葉は必ずしも教義的な言説に覆い尽くされない本質的な深みと広がりを含んでいるが、その言葉の先にはやはり福音が待ち受けているという構図が出来上がっている。それはちょうど、「逆説的反抗者」としてのイエスの姿のその先にあるものがよくみえてこないが故に、当時の民衆が募らせているメシア待望の状況の中にイエスの言動が放り込まれて、「神の国」の実現の第一歩としての宗教的受難者として奉られていることとよく見合っている。田川氏はマルコ伝の「わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、……その者を恥じるであろう」というイエスの言葉に《すさまじい自信》を見出している。《現在イエスの活動と発言をつまはじきしたり非難したりするような者は、やがて来たる終末の「人の子」によって報復されるだろう、というのだから、実質的にはイエスはおのれを終末の「人の子」と同化してしまっている》からだ。

田川氏の説明によれば、《終末の「人の子」》についての理念をまず確定した上で、イエスはおのれの活動を実質的にその「人の子」の權威に同化させていった、というわけではなく、むしろその逆に、おのれの活動の正しさについての圧倒的な確信がまずあって、その確信が宗教的未来像へと投影され、やがて「人の子」が来る時にすべて決着がつくのだ、という信仰につらなって行ったのだろう。だからここではイエスは、単にユダヤ教の終末論を継承しているのではない。そこにはイエスの活動の全体の質からにじみ出る確信が反映されている。これは絶大な自信である。もっとも、ひどく思い上った自己絶対化などというものではない。安息日に病人を癒したら文句を言われたの、やれ「汚れ」と「清め」がどうの、神殿権力に居座った貴族やら、寡婦を食いつぶす律法学者らが好きなことを言いつののに対して、断固、そうではないのだ、とつきつけていくのはむしろ当然のことだろう。多くの人は逆に、正しいとわかって、権力や体制秩序の前に言葉をにごすが、イエスは当然正しいことを正しいと主張したまでだ。この当然の感覚が圧倒的確定に結びつく。》

この強い確定は一方で、イエスを虐殺されるところまで突っ走らせたし、他方で周囲の者に対して、特に信奉者の目には常人とは異なる《けた違いの偉大さと映っただろう。このようなすごい人は、もしかすると、我々と同じ人間ではないのではないか。この人がやがて姿を変えて、天の栄光の姿をとって、雲にのってやって来るのではないか》という思いを募らせ、《伝統的な宗教的発想の枠》の中で、《「メシア」だの「神の子」だのあらゆる信仰をイエスに押しつけ、全世界の救済者としてイエスをまつりあげるところまで行きつく。》イエスが「何をする者」であったのが、周囲の人々にはもちろんのこと、弟子たちにもよくみえなかったことが、更に当時の宗教支配体制に対して徹底的に抵抗する反逆者としてのイエスの攻撃の鋭い鋒先が、弟子である自分たちにも向かってくる緊張の連続に耐えられなかったことが、イエスを「神の子」という安全地帯へとまつりあげていくことを不可避にしたということだ。

《イエスと共に闘い、同じ確定を身につけようとする代りに、イエスを神棚にまつりあげて、その前にひれふした。我々は本書を、イエスはキリスト教の先駆者ではなかった、と言い切ることからはじめた。キリスト教がイエスを教祖にまつりあげたのは、イエスを抹殺するに等しい行為だ、と。しかし、そのようにまつりあげられたについては、イエス自身にも責任がなかったとは言えない。一方であれほど奇跡的な病気の治癒にのめりこんでいき、他方で自分と終末の「人の子」を実質的に同一視するまでのすさまじい確定を見せつけられ、そこから、教祖にまつりあげられるのは、同じ線の延長線上にあることではないのか。》

イエス自身にその気は全くなかったとしても、イエスの言動がどうしてもイエスを教祖にまつりあげていく要素を弟子たちに振り撒いていたとするなら、その責任の一端をイエス自身も被らなければならないのではないのか。《そうは言っても、我々は果してイエスにむかって、やっぱり教祖にかつぎあげられたのは、あんたが悪いんだよ、それだけの配慮をして歯止めをかけておかなかったからいいかんのだ、と言えるだろうか。イエスのあの確

信は、むしろ、現在の宗教支配の体制をとことんまで打破しようとする姿勢から生れたのだとすれば、その確信から神棚の教祖が生じたのは、人の世の避け難い皮肉だ、と思うべきことかもしれない》と、田川氏は問題をイエス一人に引き絞って俯瞰しているが、おそらくそうではない。問題は、イエスと弟子たちが展開してきた運動の質であり、水準にあったことははっきりしている。

田川氏が指摘するように、弟子たちは《イエスと共に闘い、同じ確信を身につけようとする代りに、イエスを神棚にまつりあげて、その前にひれふした。》どうして彼らは、《イエスと共に闘》わなかったのか。まずこう問うべきなのだ。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」とイエスがいうとき、一つの権威者である自分に無条件で帰依せよ、といっているわけではけっしてなかった。自分と共に闘いなさいという声をそこに聞き取るなら、「自分を捨て」ことは自分の外にある「邪悪で罪深いこの時代」に出て行って闘うことであり、「自分の十字架を負う」ことは自分の闘いを「十字架」として負うことにほかならなかった。「あなたこそキリストです」と答えるペテロをイエスが戒めるというマルコ創作の場面にしても、自分と共に闘うことを放棄する姿勢がペテロに認められたから、イエスが戒めたことに気づく。

イエスが自分の虐殺を弟子たちにあからさまに語って聞かせると、そのことをいさめるペテロに「サタンよ、引きさがれ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」と叱る場面についても、同じ見方ができる。イエスは自分が虐殺されても自分の闘いは終わらないことを弟子たちに語って聞かせたのに、ペテロは弟子たちが脅えることを考えて、そんな話はしないようにといさめたと受けとられる。それに対してイエスは、自分の生死を懸けてまで闘うことの意味について考えずに、虐殺されることばかりを恐れるペテロを叱ったと考えられる。もっともこの解釈は、《イエスと共に闘》う姿勢について弟子たちに問いかけて止まないというイエス像から導きだしたものであるが、当時の宗教支配者に対するイエスの抵抗があらゆる抵抗者の内部に貫かれているのを感じ取ったとき、当然導きだされる必然的なイエス像にほかならない。

イエスが当時の宗教支配者に反抗する者であったということの意味について、ここで考えてみる必要があるだろう。もしその反抗がユダヤ教支配に対する別の教義をもってなされるなら、それは宗教的な党派闘争にほかならなかった。つまり、自分たちの教義をもってユダヤ教支配に取って代わろうとする反抗にすぎなかった。福音書がその性格に貫かれて記述されていることは間違いないけれども、福音書の中に登場するイエスの振る舞いは前述したように、党派闘争的な枠組みにけっして収まらない側面を際立たせていた。それはイエスの反抗がユダヤ教支配に向けられていただけでなく、自分たちの活動における宗教的支配の要素に対しても向けられていたからだ。弟子たちがイエスを教祖にまつりあげようとする宗教的な雰囲気、イエスが意識的に打ち破ろうとする場面が何度も出てくることに、その反抗は見出される。

もしイエスが当時の宗教支配者に対する徹底した反逆者の貌を突き出していたなら、イエスに従う弟子たちは彼の振る舞いに真理を見出し、彼を敬う者たちであっただろう。イエスからすれば、自分をキリストのように敬うよりも、《邪悪で罪深いこの時代にあって》自分と共に闘う者たちであることを弟子たちに望んだ。イエスと弟子たちの間に底流しているその深い亀裂は、イエスが十字架につけられて処刑されるまであらわにされていた。

「ペテロの否認」と呼ばれる場面は、そのことを最大に浮き彫りにしてみせた。イエスは弟子たちとの間に横たわっている深い断層が剥きだしにされたまま、十字架刑にされ息絶えていったのである。いうまでもなくイエスの処刑は残された弟子たちにとって、「イエスの不在」を意味していた。もし弟子たちがイエスの死後も活動が続けようとするなら、「イエスの不在」の中でイエスと自分たちとの間に横たわっている深い亀裂を埋めることが、最大に直面している焦眉^{しょうび}の課題であったことは明白である。

福音書についてどこまでが史実に即し、どこからが創作であり、イエス自身の生の言葉や独自な振る舞いを精緻な検証を経て取り出そうとする田川氏によれば、《結局、イエス受難劇の中で歴史的にもっとも確かな事実は、十字架につけて殺された、という点である。処刑される者がみずから十字架の横木をかつで刑場まで人々の見ている中を歩かされたというのも、ローマ人による十字架刑の慣習にあることだから、当然イエスの場合もそうだっただろう。その時イエスが自分でかつぐことができなくなり、たまたま居あわせたクレネ（キュレネ）の人シモンなる人物がかわりにかつがされた、というのも事実だろう。夜に逮捕され、「裁判」を受け、朝まで好きなように拷問されれば、いかにイエスが頑健でも、重い十字架をかついで歩き通す体力は残っていなかっただろう。》

イエスが逮捕されてローマ兵に肉がそがれ、骨が打ち砕かれるほど鞭を打たれ、エルサレムの街から処刑場のゴルゴダの丘まで、あえぎながら重い十字架を背負わされて十字架上に釘づけにされた拳句、手足から鮮血を垂れ流しながら呻くようにして息絶えていったイエスの最期については、映画『パッション』が克明に描写していた。福音書からはほとんど想像できない十字架上での残酷な死刑については、田川氏も次のように抜き書きしている。

「十字架の死は、キケロによれば、最も残酷で最も恐しい死刑である。処刑される者が同情される場合には、脛骨が折られたり、脇を槍で突いたりして、苦痛の時間を短くしてやる。そうでない場合は、不幸な処刑者は何時間も、あるいはしばしば何日間もの間苦痛にさらされて十字架にはりつけられていなければならない。そのあげくによろしく、衰弱、窒息、鬱血、心臓破裂、虚脱、あるいは何らかのショックによって死ぬ。だがその間ずっと、十字架にかけられた者は、おのれにおそいかかる猛獣、猛禽にまったく無力にさらされ続ける。おのれの傷口にとまる蠅や蛇を避けることさえできない。要するに、十字架刑は古代の裁判制度が発明したこの上もなく極悪非道な事柄である。」（E・シュタウファー、『エルサレムとローマ』）

イエスの衰弱はひどく、半日ほどで死んでいるが、その無惨な死に意味づけはできない

と田川氏はいう。《弾圧の死に希望があるとすれば、その死にいたるまでの当人の活動と、その死の意義を生かそうとする後の人々の活動にしかない。死そのものは、あくまでも悲惨な、闇から闇へと葬られるための出来事ではない。だから、イエスの死の出来事にイエスの活動の意味を見出そうとするのは間違っている。断末魔の極度な苦しみはあくまでも断末魔の苦しみなのであって、弾圧の打撃におのれの肉体がついていく苦痛の瞬間以外の何ものでもない。その一瞬におのれが生きかつ活動してきたすべての事柄の意味がこめられる、などということはいえない。》ただ、イエスの生前の活動は十字架上での無惨な死に行きつかざるをえないような、宗教的、社会的、政治的秩序とけっして和解しがたい反逆を核としていたことを読み取る必要があるだろう。

断末魔の中での「我が神、我が神、何ぞ我を見捨て給いし」(マルコ15・34)というイエスの叫びが、その叫びを言葉どおりに受けとめるなら、イエスの無惨な死をより一層無惨なものにしていた。田川氏はその断末魔の叫びについてこう考える。

《古代人イエスは、神を信じていた。自分が生命を賭して貫いてきた活動は神の側の正義だと確信していた。おそらくイエスも、おのれの逮捕、処刑に際して神がみずから出馬して、奇跡的におのれを救ってくれるだろう、などと考えるほど甘かったわけではなからうが、やはりこのように弾圧され、無惨な死にさらされれば、いったい神は本当に正義の側に立つのだろうか、と懷疑に陥らざるを得なかっただろう。いや、その程度の懷疑なら、すでに何度もくり返し通過してきているはずだ。ここにあるのはもはや懷疑でなく、絶望である。神は俺を見捨てやがった。》

田川氏は続けて、絶望の《瞬間のイエスの心を思う時、慄然としない者はいないだろう》と書くが、神を信じていたイエスのみならず、弟子たちを含むイエスの周囲の者にとっても、イエスの断末魔の叫びは本当は深刻なものであった筈だ。その絶望は「神の不在」を突きつけていたからだ。十字架上でイエスが味わった無惨な死は、単に視覚では捉えられない、「神の不在」が立証されるという根底的な深刻さをもたらしていたにちがいない。それ故に、《このあまりに赤裸々な断末魔の死に慄然と対面するのを避けるため、解釈者はイエスからこの言葉すらも奪おうとしてきた》。ある者は、《神の子たる世界の救済者がこのように無惨に絶望して死ぬはずがない》として、断末魔の叫びは歴史的事実ではないといい、《他の者は、これは旧約の詩篇22篇の冒頭の句の引用であって、この詩の最後は、「人々は主(なる神)のことを来たるべき世々まで語り伝え、主(なる神)がなされたその救いを後に生れる民に述べ伝えるでしょう」という神を賛美する句で終わっているのだから、イエスはこの時、「苦難の義人」として神を賛美しつつ息をひきとったのだ、と解釈する。》

もちろん、《これは、律法学者の間の聖書解釈の論争の場面ではなく、断末魔の悲鳴である。断末魔の悲鳴には、一番言いたいことそのものを口に出すものだ。確かに、当時のある程度の教養人として、詩篇のさまざまな句はイエスの頭にも暗記されてつまっていただろう。神は俺を見捨てた - 十字架の苦痛の中でその思いが強まるにつれて、イエスは

その思いをこの句に託して叫んだのだろう。この短い句は、引用というよりも、断末魔の絶望をそのまま表現している。》十字架上のイエスは自分の無惨な死と引き換えに、この《断末魔の絶望》を弟子たちに残したのである。それを彼らがどう受けとめるかが最大に問われていたといえる。

《ただし、イエスがこの句を叫んだせいで、教団においてイエス受難物語を語った語り手は、詩22篇に出てくるいくつかの描写がイエスの死の場面でもそのまま実現した、という風に物語をつくってしまった。「すべて私を見る者は私をあざ笑い、唇を突き出し、頭を振り動かして言う、彼は主（なる神）に身をゆだねた、主（なる神）が彼を助けてくれるんだろう。」ローマの兵隊は、「互いに私の衣服を分けあい、私の着物をくじ引きにする。」

こうして受難物語の語り手も、後世の解釈者も、断末魔のイエスのあまりに無惨な意識に直面して慄然とするのを避けようとした。そういう解釈者の意識の中で、イエスは「復活」させられる。その次には、イエスの死の意味づけがはじまる。ついには、イエスという救済者は十字架の死によって世の人々を救うために此の世に来たのだ、と言われるようになる。イエスは十字架にかかって死ぬために生きた、というわけだ。

そうではない。イエスのあのような生と活動の結末として、あのような死があった、ということだ。あのようにすさまじく生きたから、あのようにすさまじい死にいたり着いた。いやむしろ、あのようにすさまじい死が予期されているにもかかわらず、敢えてそれを回避せずに生きぬいた、ということか。イエスの死に希望があるとしたら、死そのもののの中にではなく、その死にいたるまで生きかつ活動し続けた姿の中にある。》

田川氏はそのようなイエス像を提示して本書を終えるが、十字架上で息絶えたイエスは、死後十字架から地上に降ろされたのではなく、「復活」という死の意味づけの中でイエスは再び、十字架上に釘づけにされたのだ。一度目はローマ帝国とユダヤ教支配者たちによって地上で十字架にかけられ、二度目は弟子たちによって天上で十字架にかけられた。イエスが死んでしまえば、もはや生前の彼をキリストとしてまつりあげようとしていた弟子たちをいさめる者は誰一人いなくなった。自分と共に闘うことを弟子たちに願っていたイエスとすれば、自分の死後も自分と同じような無惨な死に様になるかもしれないが、自分が闘ってきたように闘うことを彼らに欲したか、それとも神による救出が皆無な中での絶望的な闘いの過酷さの前ではもはや彼らに何も望まなくなったか、イエスは一切を黙していた。

イエスの死後、イエスの十字架の無惨な死をどのように受けとめ、どのようにして生きていくかはすべて弟子たちの問題であった。選択肢はイエスの活動を引き継ぐのか、引き継がないのかの二つであった。引き継ぐのであれば、どのように引き継ぐのが最大に問われていた。ルカの福音書にのみ書き留められている、「父よ、彼らを赦したまえ。彼らは自分が何をしているのか、わからないのです」という十字架上のイエスの言葉が、創作であるかもしれないとしてもその創作を超えて、イエスという存在の雰囲気をよく伝えてしていると把握するなら、その言葉は単にイエスの処刑を望んだ群衆に限定されず、十字架

上から見下ろされるすべての人々、つまり、弟子たちをも含んでいたと解される。そうすると、イエスの十字架上での断末魔の叫びには、地上の人々から見捨てられる絶望に、神からも見捨てられる絶望が加わっていたと受けとめられる。

「自分が何をしているのか、わからない」ままの弟子たちが自分たちの判断で、自分たちの活動を復活させるために、「イエスの復活」をどうしても必要とせざるをえなかったという筋書きがみえてくる。絶望していたのは十字架上のイエスだけではなかった。十字架上のイエスを見上げる弟子たちも、イエスの絶望的な叫びを耳にして絶望していたにちがいがなかった。このすさまじい絶望を希望に変えることなど、到底人間の力で出来る技ではなかった。しかし、死んだイエスと異なって、弟子たちは生きていかねばならなかった。生きていくには希望が不可欠だった。活動が続けていくなら、尚更そうであった。神に出来るのは奇跡であったが、人間に出来るのは手品であった。弟子たちの希望は絶望的な物語をつくりかえるなかで、到来させるよりほかに仕方がなかったのだ。

イエスの受難物語を克明に描写した映画『パッション』は当然のことながら、十字架上でのイエスの断末魔の叫びや絶望的な死を映像としてむごたしく大写しにしてみせた。超保守派のカトリック教徒であるメル・ギブソン監督はインタビュー（『キネマ旬報』04年6月上旬号）の中で、映画を作った目的について、「世の中は矛盾にあふれ返っている。カトリックの大学が中絶された胎児を化学の実習に使っているとか聞くと我々の信心はいやでもゆらいでしまう。神父たちがタブーをおかし、政治的な行動に走り、金稼ぎにいそしみ、エゴを恥かし気もなく見せる今、宗教の持つ希望、愛、許しと言った原点に戻って、明確なメッセージを伝えたいと思ったのだ」と語っているが、イエスの死後二千年を経過しても続いている《邪悪で罪深いこの時代》に対する怒りから、ギブソンはこんな世の中にするために、イエスは残酷な犠牲になったわけではないというメッセージを伝えようとしたと察せられる。

この文章も映画『パッション』の衝撃に促迫されたものであるが、キリスト教の原点に戻ろうとする意図が込められたこの映画はそれ故に、イエスの受難とその後のキリスト教の活動との間に横たわる大きな裂け目をも避けがたく描写してしまっている。イエスの受難の描写からもたらされる衝撃は、受難を十字架上で引き受けて息絶えるイエスを、世の人々の救済者たるキリストとしてまつりあげてきたキリスト教の無力と墮落を際立たせてしまう衝撃をも必然的に浮かび上がらせていたからだ。イエスの受難はその後の地上の人類に善たる影響を全く及ぼさなかったし、イエスの犠牲によって救済された筈の世の人々は、相変わらずの《邪悪で罪深い》時代の中で生き続けている。映画は一体誰によって、誰のためにイエスは残虐な仕打ちを被らねばならなかったのかと描写していくが、イエスの死を引き継いだかもしれないが、イエスの生前の活動を全く引き継がなかったキリスト教の歴史に対する疑問をますます深めていく衝撃を観客に与えつづけていることは間違いない。

2004年8月24日記